

鈴を慕う女

野村胡堂

—

「八、あれを跟^つけてみな」

「へエ——」

「逃がしちやならねえ、相手は細くねえぞ」

「あの七つ下りの浪人者ですかい」

てならいしししょう

「馬鹿ッ、あれはどこかの手習師匠で、仏様のような武家だ。俺の言うのは、その先へ行く娘のことだ」

「へエ——、あの美しい新造しんぞが曲者なんですかい。驚いたな」

「静かに物を言え、人が聞いてるぜ」

錢形の平次と子分のガラツ八は、その頃繁昌した、下谷の徳蔵いなり稲荷に参詣するつもりで、まだ朝のうちの広徳寺前こうとくじを、上野の方へ辿たどつておりました。

「ガラツ八、よく見て置くんだよ、心得のために話して置くが——」

「へエ——」

平次は一段と声を落しました。

「武家はちよいと怖こわい顔をしているが、よくよく見ると顔の造作

の刻みが深いというだけのこと、まことに人相に毒がねえ、――
――牙きばのある獣けものに角がなく、角のある獣に牙がねえのと同じ理窟りくつで、
あんな怖い顔をした人間は、十中八九は心持のいいものだ。とこ
ろが本当の悪党とか、腹の黒い人間というものは、思いの外ノツ
ペリした顔をしているものだよ。見るがいい、あの武家の袂たもとの先
には、ここからでも見える位、朱が付いてるだろう、あれが手習
師匠の証拠だ。子供の手習を直す時しゅすずり朱硯しゆすずりに袂の先が入ったんだら
う」

「へエ――、するとあの美しい娘が悪人てえ証拠は？」

「あの娘と摺れ違った時見ると、袖の先に同じように赤いものが

付いてるが、それは朱じゃなくて血だ。それにあの娘は広徳寺前で、袂から泥焼どろやきのお狐様を落しだろう」

「それは、あつしも見ましたよ。あれは徳蔵稲荷の門前で売っていますね、素焼のお狐どろえのぐに泥絵具を塗って、一つが十二文。あれは懐中ふところへ忍ばせて置くと、願事が叶かなうとか言つて、手弄てなぐさみをする手合がよく持っていますが——」

「それだよ、そのお狐を若い女が袖に忍ばせているのも可笑おかしいが、何かの機はずみで落つことすと、乾き切った往来の上で尻尾が欠かけた。——この通り」

平次は何時の間まに拾ったか、内懐から尻尾の欠けた素焼

の狐を出して見せました。

「何時の間に拾いなすったんで、早業だね、親分は？」

「馬鹿、静かに物を言え、往来の人が顔を見るじゃないか、——

ところで、女が物を落すと、どんなに忙しい時でも大抵踏み止つ

て一応は拾い上げるものだ。そして、役にも立たないことだが——

——毀れたものなら、元の通り継いでみるとか何とか、どんなにつ

まらない物でも、それ位の未練は持っているものだ。ところがあ

の娘はどうだ」

「お狐を落として、尻尾が欠けると、ちよいと振り向いたつきり、

拾い上げようともせずサッサと行って仕舞った——成程、こい

つは可笑しいや」

「解ったか、八。あの女は馬鹿か豪傑か、でなければ腹の中に容易でない屈託くつたくがあるんだ。それも並大抵のことではない、女が願事が叶うという禁呪ましないのおコンコン様を捨てて行くのは容易じゃない」

平次の明察は、すっかりガラッ八を景気付けました。

「ね、親分。この仕事を私に任まかしちや下さいませんか」

「何だと」

「八五郎の手柄初めに、根こそぎ洗い出してみましよう」

「大丈夫か、ガラッ八」

「大丈夫かは心細いな」

「――」

「第一、あんな吹けば飛ぶような新造を、銭形の平次親分とその一の子分の八五郎とで跟けたとあっちゃ、世間の聞えもよくねえ」
「それもそうだな。万に一つの間違ひはあるまいが、あの娘を見失っちゃならねえよ。俺は徳蔵稲荷へ行つて、お前の帰つて来るのを待っているから」

「有難てえ。それじゃまか任せて下さるんだね、親分」

「ドジを踏むな、相手が綺麗な新造だと思つと間違いだぞ」

「だ、大丈夫――」

ガラツ八は平手を額にかざすと、平次に別れて娘の後を追いました。

二

平次が徳蔵稲荷へ行つて見ると、果して思いもよらぬ大事件が待ち構えておりました。

神様にも流行はやり廃りすたりで、今は跡形あともありませんが、その頃大変流行あとかた行った徳蔵稲荷の門前は、何があつたのか、朝から黒山の人だかりです。ハツと思うと早足になって、人混みを分けるともなく顔

を出す、

「アッ、銭形の親分、丁度いいところで」

町の口利くちぎきらしいのが、顔見知りと見えて、袖を引かぬばかりに

案内してくれます。

「どうなすったんです。これは？」

「大変な間違いがありましたよ、あれを見てやって下さい」
指したのは、ささやかな玉垣の下。

「あッ、これはひどい」

銭形の平次も思わず声を立てました。

人の死体さんこくや、残酷な場面は、嫌いだといっても随分沢山見て来

た平次ですが、まだ、こんな変ったのは見たこともありません。
真新しい紅白の鈴の緒おで縛り上げられた中年者の男が、二た突き三突き、ヒ首あいくちで刺さされて、見るも無慙むざんな死にようをしているのです。

「銭形の親分、この通りだ。これは堂守の仁三郎とって、町内の人気者だ。人に怨うらみを買かう性たちの人間じゃない、金を溜めるような心掛の男でもねえ、それがこんな虐むじたらしい有様になって、朝詣りの人に見付かったんだ。何とか敵を討うってやって下さい」

「へエ——、大変な事をする奴もあるものですね。玉垣の前で堂守を殺すなんて、随分罰ばちの当たった話じゃありませんか」

平次はそう言いながら、一と通り死体を検べましたが、四十五六の巖乗がんじょうな男で、女や子供に縛られそうな柄がらではありません。朝といつても日中ひなかの事ではあり、多分あてみ当身か何か食わされて、一度目を廻したのを鈴の緒で縛り上げられ、後で気が付いて口を利こうとしたので、ヒ首あいくちで盲目めくら突きにされたものでしょう。

もつともまだ人通りも少ない時分で、死体は玉垣の横手の方にあったのですから、夜が明けたといつても一と刻ときや半刻は、知らずに過すこせば過せないこともありません。何人目かの朝詣りの人が、拝殿に下っている鈴の緒が引千切れているのに気が付いて急に騒ぎ出すと、間もなく玉垣の横、一寸人目に付かないところに、

堂守どうもりの死体が転がっているのが見付けられたのです。

役人の見える前に、平次は忙しく四方を探しましたが、賽銭箱の上の下っている大きな鈴と、その鈴に付いた紅白の鈴の緒が千切り取られているほかには、何の変ったところもありません。

賽銭泥さいせんというのは、何時の世にもあったもので、器用なのは烏糍とりもちで釣り、荒つぽいのは箱を打ちこわすのですが、見たところ、そんな様子は少しもありません。

「ハテ——」

銭形平次ほどの者も、思案に余って双腕もううでを拱こまぬきました。

そのうちに、徳蔵稲荷の前は弥次馬で一パイ。

「仁三郎が殺されたとよ」

「あんな仏様みてえな人間を殺す奴は、どんな野郎だろう」

「それに玉垣迄血で穢けがしてよ、罰ばちの当った畜生じゃないか。お稲

荷様だつて黙っちゃいなさるめえ」

こんな噂を平次はジツト聴いておりました。この事件には、余程深い奥がありそうです。やがて平次は、門前の土産物屋へ行つていろいろ尋ねて見ましたが、朝詣りの客は土産物などに眼をくれないので、ツイ今し方表戸を開けたばかり、何にも知らないという心細い有様です。

「十八九の美しい新造が、この禁呪まじないのお狐を買つて行かなかつた

かえ」

「へエ、そんな事もありましたでしょうが、何分毎日二三十ずつ売れるお狐さまですから、はつきり覚えちゃいません。場所柄で芸妓衆や水茶屋の姐さん方がよくお買いになりますよ」

土産物屋のお神さんみやげの記憶きおくは甚だ心細いものです。

三

「ちよいと、お兄にイさん」

不意に、本当に不意に娘は立ち止りました。お屋敷風とも町家

風とも付かぬ、十八九の賢うりざねそうな瓜実顔、どこかお侠きやんなところはありますが、育ちは良いらしく、相応に美しくも可愛らしくもあ
るうちに何となく品があります。

「――」

不意討を喰らって、ガラツ八は往来の真ん中に立ち辣すくみました。
秋が深いにしても、朝の光の中に鬱陶うつとうしく頬冠り、唐棧とうざんを端折つ
て、左の拳こぶしで弥造やぞうをきめた恰好は、どう鼻屑ひいきめ目に見ても、あまり
結構な風俗ではありません。

「私の家はここよ、後を跟けて来たんならもうお帰り」

「へエ――」

「何て間拔な狼だろう」おおかみ

「あッ」

虹のような啖呵たんかを、ポカンとしている向う額ひたいに浴びせて、娘は路地の中へ颯さっと消えてしまいました。あまりの鮮あざやかさに、暫くは後を追うことも忘れて、娘の言葉を噛みしめるように、ガラッ八は立ち止りましたが、

「あッ、いけねえ」

路地へ飛込んだがもういけません。中は羊腸ようちようたる抜け裏、娘の姿は本当に虹のように蒸発してしまつたのでした。

「畜生め」

大きく舌打を一つ、折角引受けた大仕事を縮尻しくじってしまつて、

面目次第もなく、朝の元の大通りへバアと出ると、丁度通りか
かったのは先程の武家、——親分の平次が手習師匠に見立てた五
十前後の浪人者です。

「この武家を跟つけてやれ、新造の尻を追い廻すよりは、気がとが
めないだけでもいい」

勝手な独り言を言いながら、少しやり過して、件の七くだんつ下りの
羊羹色浪人ようかんいろの後から跟け始めました。それから大通りを暫く行っ
て、路地を二つ三つ曲ると、とある路地の中へ。

「どっこい、今度は逃さねえぞ」

浪人者の踵かかとを踏むように続いて入ろうとすると、今度もまた見付かってしまいました。

「これこれ町人」

「へエ、へエ」

「先程から拙者の後を跟着ておるようだが、何か用事でもあるのかな」

「飛んでもない」

「おいはぎ剽盗泥棒ならあきらめて帰るがよかろう。この通り無禄むろくの浪人

者だ、一文も持合せがない。その上年こそ取っておるが、拙者は腕が出来ておるぜ。ハッハッハッハッ」

カンラカラカラと笑い飛ばすと、刻みの深い物凄い顔の紐が緩ゆるんで、群青ぐんじょうで描いたような青髯あおひげの跡までが愛嬌になります。

「へエ、あつしは悪い人間じゃ御座いません」

「そうだろう。その方の人相は、どう買かい被かぶつても悪人という相じゃない。鼻そつが反そつくり返かへつて、眼尻まなぢりが下くだがつて、齒はが少すくし乱らん杭ぐいだな。そんな刻みの深い顔は、総くて善人ぜんじんか悪人あくじんにあるものじゃ」

「へエ——」

「悪人はもう少しノツペリして凄味すじみがあるな」

ガラツ八、もうすつかり面喰めんくらつてしまいました。

「親分もそんな事を申しましたよ、あのお武家は、一寸凄すい顔を

しているが、きつと仏様のような方に相違ないって——」

「仏様は少し嫌だな、まあいい。ところで何の用事で拙者の後を跟けた、返答によつては許さんぞ」

「決して旦那の後を跟けたわけじゃ御座いませぬ。先刻せんごく旦那の前へ行つた、あの綺麗な新造が、どこへ行くかと思つて、ちよいと、

その——」

「馬鹿野郎」

「へエ——」

「お前のような馬鹿がおるから、若い娘が一人歩きも出来ないのだ。今日だけは見逃してやる、さっさと帰れ」

「へエ——」

ガラツ八は全く散々な敗北でした。二三町スツ飛んで、浪人者が路地の中へ消えるのを持って、近所の酒屋で聞いて見ると、白川鉄之助という九州辺の浪人者で、大した金持という訳ではありませんが、生活には困らないらしく、別に仕官の途を求めなくても、毎日ブラリブラリと遊んでいるということでした。

「あの浪人者は、てならいこ手習子を集めて、師匠をしているでしょうね」

「いいえ、そんな話は聞きませんよ。身寄も知辺もない一人者で、時々ブラリと外へ出る外は、ちんぷんかんぷん珍糞漢糞な本ばかり読んでますよ」

「しめたッ」

ガラツ八は、それだけ聞くと、横つ飛とくぞういなりに徳蔵稻荷へ駆け付けました。娘を見失ったのは、何と言つても大失策だいしっさくに相違違ありませんが、その代り、あの浪人者を手習師匠かんでいと鑑定した、親分平次の失策も搦んだのです。これなら五分と五分——いや七分と三分位かも知れませんが、兎に角、親分のお小言かんわも緩和されるだろうと思つたのです。

徳蔵稻荷の前へ歸つて来ると、黒山の人ばかり。

「ハイヨハイヨ」

弥次馬を別けて入はいつて見ると、玉垣たまがきの下、紅白の鈴の緒しぼで縛しばられた堂守の死体を前に、銭形平次は腕こまぬを拱こまぬいて考えているところ

でした。

「親分、これはどうした事です」

「おお、八か。あの娘はどうした」

「入谷まで跟けて行ったんですが、恐ろしい八幡の藪知らずの抜け道へ入り込んで、到頭消えっちまいましたよ」

「何？ 見失った？ 馬鹿野郎ッ」

「その代り親分、あの浪人者は手習師匠でないってことまで突き留めて来ましたぜ」

「そんな事を誰が頼んだ、馬鹿ッ。向うへ行ってしまうえ」

「へエ」

ガラツ八は、まことに滅茶滅茶です。

四

徳蔵稲荷の堂守どうもり殺しは、それつきり下手人げしゆにんが判りませんでした。銭形平次は身一つに引受けて、いろいろ探索たんさくの手を費ついやしましたが、何としても解りません。

仁三郎は全くの一人者で、金も係累けいるいも、人に怨を買おほう覚えもな
く、その上、賽銭箱さいせんが無事で、取られた物といつては、拝殿すぢの鈴
だけ。これも仁三郎を縛るために、鈴の緒を引千切った時、一緒

に転げ落ちたのを、その儘誰か拾って猫ばばをきめ込んだのかもわかりません。

しかしこの時代の迷信深い弥次馬が、お稲荷棗の拝殿の鈴を隠すというのも受取れないことです。

さては、鈴を盗むためであつたか——

フト平次はそんな事を考えました。しかし、社の拝殿の鈴などは、迷信的な気持に逆らさかつてまで盗むほどの物ではなく、第一小さい社はすっかり荒れてしまつて、最近一手に寄進する金持があつて、改造に取かかる手筈にまでなつていたのですから、古い鈴などは、その時は自然新しいのと替えられるでしょうし、手順

を踏^ふんで頼めば、随分安く手に入らないとは限りません。どう考えても、人を殺してまで奪るほどのものではなかったのです。

それにつけても、あの娘を逃したのは、何という手ぬかりでしょう。子分思いの平次もこの時ばかりは、ガラツ八に半日も物を言いませんでした。袖の尖端^{さき}に血のついた娘——それも、間違はなくこの境内から出た女の行方を、つまらない手違いから見失ってしまったというのは、何としたドジでしょう。

最後に残る手段は、鈴の行方を調べることです。平次はその日のうちに、あらゆる子分を狩集めて、界隈の古道具屋や堂宮を聞かせました。

「親分の鑑識めがねは曇らねえ、確かにありますぜ」

第一に飛び込んで来たのはガラッ八。

「何があつたんだ」

と平次、さすがに腰が上がります。

「近頃下谷中の古道具屋から、鈴を買い集めた者があるつて言いますぜ」

「本当か、八」

「本当か——は情けねえ、この足で歩いて、この耳で聞いたんだ。間違いつこはねえ、その上、堂宮の拝殿の鈴がチヨイチヨイ盗まれる」

「何だと」

「親分、こりやどこかに鈴を集めて謀叛むほんでも企むたくら奴があるに違ちげえねえ——」

「馬鹿だなお前は、鈴めえが鉄砲玉すずの代りになるかよ——とところで、その鈴を買いに歩くのは男か女か」

「男も女も、武家も、町人もあるってことですよ」

「何時頃から始まったことなんだ」

「なんでも半年ばかり前からボツボツあった事だが、激しくなつたのは、この二三日だつてことですよ」

「よし、それで解つた。八」

「へエ——」

「手前、何時でも、親分のためなら命を投げ出すと言ったね」
平次は少し屹きつとなります。

「言いましたとも。憚はばかりながら小判形の八五郎、金や命に糸目は
付けねえ」

「糸目を付けたくも、金なんか持つちやいめえ」

「凶星ずほしツ、親分のめがねは曇らねえな」

「幸い命だけは一つ持っているだろう、そいつをちよいと貸して
くれ」

「お安い御用だ、他所よそゆき行のですか、それとも平常ふだん使いのですか」

「馬鹿だな、お前は」

すべてこう言った調子ですが、昔の江戸ツ子は、こうした警句のために、自分の命位は何とも思わずに賭かけました。

「誰にも言っちゃならねえよ、俺達の知り合いから出来るだけ鈴を集めるんだ、——それから、熊や三公にそう言つて、まだ手の届かねえ場末から鈴を集めさせ、それを背負しょつて、手前暫く鈴を売つて歩くんだ」

「そんな事なら何でもありやしません、やりますとも」

「血眼で鈴を探している奴は、鈴で釣るより外てに術はねえ」

「解りましたよ、親分。鈴でも半鐘はんしょうでも売つて歩きますよ」

物事を単純に考えるガラツ八は、もうすっかり成功したつもりで飛出してしまいました。

五

その翌る日、八五郎はすっかり鈴屋になり済して、入谷から根岸の方へ流しておりました。まんすじ万筋の野暮ったいあわせ袷てっこうきやはんに、手甲脚絆をつけ、置手拭までした恰好は、誰に教ったか知りませんが、すっかり行商人の板についております。肩から小鈴の箱を飴屋さんに掛けて、両手には、大きい鈴を、新しいのと古いのを取交せて、

五つ六つずつ提さげました。

「——エー、鈴はいりませんか、大きいのは拜殿の鈴から、小さいのははさみ鋏の鈴、腰下げからポツクリの鈴——新らしいのもある、古いのもある。金の鈴、銀の鈴、真鍮しんちゆうの鈴、銅あかの鈴——、足結あゆいの鈴、手の鈴、釧くしろの鈴、大刀の鈴、鈴鏡すずかがみ。さては犬の鈴、鷹たかの鈴、凡そ鈴と名の付くものなら何でもある——鈴は要りませんか——

」

鈴を慕う女



©2017 萩 柚月

ガラツ八は時々懐ふところを覗いて、仮名かなで書いて貰った口上書を弁慶べんけい読みにしなから、こう言った声を張り上げました。

猫の蚤取りのみとさえ触れ歩いた時代ですから、鈴売りなどは決して珍らしいものではありません。

「チヨイと、鈴屋さん」

八五郎は時々呼び止められて、猫の子の鈴、鍔はさみの鈴などを売りましたが、徳蔵稲荷で盗まれたような、大きな鈴は誰も振り向いてはくれません。

翌る日、ガラツ八は根岸の奥はいへ入り込んでおりました。すっかりもう板について、懐を覗かなくともスラスラと口上も言えるし、

もとで
元手かまわずの鈴も相当売れますから、何だったら、この儘足を洗って、鈴売りになるのも悪くない——といったような暢気のんきな気持になつておりました。

「エー、鈴屋で御座い。鈴はいりませんか、手の鈴、足結あゆいの鈴、
釧くしろの鈴——」

と張り上げていると、

「ちよいと、鈴屋さん」

大家たいけの寮りようの裏手らしい黒板塀くろいたべいの潜りが開いて、若い女が小手招てしやうぎをしております。

「へエへエ」

「御新造様が鈴を御覧になりたいと仰しやるよ、ちよいとここから入っておくれ」

「へエへエ」

誘さそわれる儘に、ヒヨイと庭に入ると、後ろの潜戸はピシリと締められました。その機はずみに振り返って見ると、呼込んだ娘というのは、三四日前、広徳寺前から跟けて、入谷で首尾よく撒まかれた、あの袖の先に血の付いた袷を着ていた娘だったので。

「あッ」

ガラッ八は、思わず声を出しましたが、庭石に躓つまずいたような振りをして誤ごま魔化まかしました。様子はすっかり変っているし、手拭は

吉原冠りにしているし、多分俺とは気が付くめえ——といった、相変らずガラツ八流の楽天的な心持で、娘の後に跟いて、寮の庭を廻りました。

「御新造様、鈴屋を呼んで参りました」
障子の中へ声を掛ける。

「御苦勞だったね、八重」

優しく応^{こた}えて、秋の朝日の這いよる障子を開けたのは、二十二三とも見える、少し病身らしいが、恐ろしい美人。ガラツ八も吉原冠りの手拭を取って、思わずヒョイとお辞儀をしてしまいました。

眉の跡青々と妙に淋しく細そりしておりますが、水際立った元あととおおお
ろくすがた

緑姿で、敷居の上に桜貝のような素足の爪を並べて立つと、腰か
しんじゅいろ かすみ たな
ら上へ真珠色の霞が棚びいて、雲の上から美妙的な声が聞えると
いった心持、ガラツ八は一ペンに降参してしまいました。

「下町にはいるそうだが、この辺へ鈴屋が来るのは珍らしいね。
どんな品があるか、皆な見せておくれ、気に入らさえすれば、幾
箇つでも買って上げるから」

「へエ——」

あぜん
唾然としていたガラツ八は、漸ようやく人心地が付くと、そそくさと

鈴の箱を開けました。

しかしこの時、燈籠とうろうの蔭、木戸の後ろ、縁側の隅などに、幾人かの間人が、餌えに狙い寄る猛獣のように、眼を輝やかしているのに、八五郎少しも気が付かなかつたのです。

箱の中の鈴と、手に持った鈴と、洗いざらい縁側に並べると、八五郎を案内した美しい女中は手を挙げて合図しました。

「それッ」

四方から飛出したのは、悉ことごとく女。女中、小間使、お針、飯炊き、あらゆる種類を尽して、八五郎の八方からサツと飛びかかります。

「あッ、何をする」

と言ったが追い付きません。女と思つて甘くあしらっている内

に、風呂敷を被^{かぶ}せて、帯紐^{おびひも}で縛^おつてその儘、物をも言^いわず奥へ担^かぎ込みます。

六

ガラツ八は出かけてから、もう三日帰りませんでした。銭形平次、さすがに放^{ほう}つても置^おけません。

与力の笹野新三郎を訪^{たず}ねて訊くと、石原の利助は堂守殺しの下手人として、徳蔵稲荷の隣に住んでいる、やくざ者の仙吉を挙げたという話。これは賭博^{ぼくち}の元手に困^まつて、仁三郎の財布^{さいふ}を狙^ねつた

ものと見たわけです。

仁三郎の臍繰へそくり——そんなものが若しあつたとしたら、ろくに鍵かぎ

も錠じょうもない、仁三郎の部屋へ忍び込んで、何とかして奪とるのが本

当で、賽銭箱さいせんばこの上に登らなければ取れない鈴の緒を引千切つて、

玉垣たまがきの下へ死体を投げ出して置くというのは、あまりに念入りな

頭の悪さです。

「そんな筈は御座いません。下手人は思いもよらぬ大物でしょう」

平次はそう言って与力の役宅を出しましたが、さて、大きい口を
利いたものの、手繰たぐって行く手蔓てづるが一つもありません。

念のために下谷へ引返して、徳蔵稻荷うじこそうだいの氏子総代——和泉屋と

いう町内の酒屋の主人に逢つて訊いてみると、思いも寄らぬ新事
実が^{あが}挙りました。

それは、徳蔵稲荷の建物はひどく古くなつたので、最近堀留の
穀物問屋で、諸藩のお金御用も勤め^{みょうじたいとう}苗字帯刀まで許されている、
大川屋孫三郎が、全然新しく建てて寄進することになり、材木ま
で用意して、来春早々工事に取かかる運びにまでなつているとい
うのです。

それだけなら何でもありませんが、その上、古い堂宇は、信心
のため孫三郎が申受け、御本尊を除いた一切の^{のぞ}附属品と共に、根
岸の寮の広い庭に移して、その儘^{まつ}祀ろうという事に決つていると

いう話なのです。

「賽銭箱から鈴の緒まで新しいのと代えて下さるそうで、氏子一同大喜びで御座います。それにつけても、こんなに荒れたままで大川屋さんに差上げては、いくら何でもお気の毒だからと申して、玉垣と鳥居を塗った序ついでに、木連格子きつれごうしだけは紅殻べにがらで塗って置きました。その矢先あの騒ぎで、本当に私共まで、どんなに迷惑したかわかりません。親分のお力で一日も早く下手人が捕まるように――と、氏子うじこ一同そう申しております」

和泉屋の主人の話を知ると、平次の真つ暗な胸には、サツと一道の光明が射しました。

「有難う御座いました、いろいろ解りました。稲荷様の罰ばちということもありますから、そのうちには下手人も判りましよう。お喧やかましゅう——」

和泉屋を飛出した平次は、その足ですぐ根岸の大川屋の寮を日当てに行きました。まさかガラツ八の真似をして鈴屋になつて出かけるわけにも行きません。岡っ引にしては少し手堅てがたい平常着ふだんぎの儘、先ず四町四方もあろうかと思うような板塀の外をグルリと一廻りしてみました。

近所で聞いてみると、大川屋の主人というのは、働き盛りの四十男ですが、早く配偶つれあいを失い、先年吉原で馴染おいらんを重ねた華魁おいらんを

請出うけだして、親類の承諾しょうたくを得て後添に直しました。これが不思議と

心掛ほりどめの良い女で、美しくも優しくもあつたのですが、何分の病身、

堀留ほりどめの本宅に置くわけにも行かず、根岸にこんな立派な寮を建て、女手に飽かして住わしてあるのだということでした。

その女は、お米といつて、不思議に鈴の音を愛し、長い間買ひ集めて家の中は鈴だらけ、召使を呼ぶにも食事を知らせるにも、一々鈴を鳴らすのだと聞いて、平次はすっかり有頂天になりました。

門を入つて耳を澄ますと、成程秋の空気に響ひびいて、どこからともかく、床ゆかしい鈴の音が聞えて来ます。

「これだこれだ」

平次は独り言を言いながら、寮の玄関にかかりました。

七

寮の玄関りょうには、大きい鈴がブラ下がっておりまして。その頃では珍らしい試みで、成程『鈴屋敷』だと思ひながら、二つ三つガランガランとやると、玄関の障子が滑なめらかに開いて、

「何誰どなた様で——」

首をかしげたのは、忘れもしないガラツ八に跟けさした娘。成

程桃色の啖呵たんかは切りそうなお侠きやんな娘です。

「あッ、お前さんは矢張り此家ここの人か」

「――」

娘はサツと顔色を変えて、その儘障子を締めそうにするのを、「どっこい待った。俺はお上の御用を聞いている平次という者だが、お前さんには徳蔵稲荷の仁三郎殺しの疑いがかかっている。変なことをしちや反かえつてためにならねえ、黙って主人に取次いで、どうして鈴を集めたか、仔細を話して明あかしを立てなきやア、どんな事になるか判らないぜ」

平次の態度には、商売柄にも似ぬ、嚙ふくんで含めるような物優し

さがありました。娘はハツと顔を伏せましたが、思い定めた様子で、

「暫くお待ち下さいまし」

静かに奥へ消えます。

やがて通されたのは、さまで広くはありませんが、妙に小綺麗に片付いた寮の奥座敷、待つ間もなく、

「お待たせいたしました。銭形の親分さんだそうで、丁度いい方にお目にかかりました。私は大川屋の配偶つれあいで、米と申します」

敷居際で静かに挨拶したのは、最早名妓めいぎといった俤おもかげはありませんが、如何にも洗練せんれんされた美しい女房振りです。

「面倒な駈引かけひきは抜にして、早速承うけたまわりますが、手前共の八五郎という男——、鈴売に身をやつして参った筈で御座いますが、あれはどうなりました」

平次の調子は、平淡なうちにも一步も仮借かしゃくせぬ厳しさがありませんでした。

「ハ、ハイ、あの方は、身分を仰しやいませんので、全く敵の廻し者と思ひ込み、しばらくこの寮へ留まつて頂きました」

「そうでしよう、——いやそう打明けて仰しやつて下さると大変私もお話を申上げよくなります。ところで、その次に伺いたいの
は徳蔵稲荷の鈴の事ですが、あれは一体どうなりました」

平次の言葉は直ちに問題の核心かくしんに触れて行きます。

「あれは少しも存じません。先程お取次に出ました、召使の八重と申す娘に、朝夕あの鈴を見張りながら、お詣りをさせて置きましたが、あの日行つて見ると、鈴は紅白こうはくの緒おごと引千切られ、玉垣の下には、鈴の緒で縛られた死骸があつたと申します。八重は気丈な娘で御座いますから、もしやと思つて死骸の近所を探したのですが、鈴は矢張り無かつたそうで御座います。その時袂たもとの先を少し血潮で汚よごしたとか言つておりました」

お米の答は明快を極めました。眉の跡の青々とした明眸あまのまの女主人あるじは、さすが昔の全盛しんを偲しのばせて、年にも柄にも似合わぬ頭の

よさがあつたのです。

「そうでしょう。——あの娘こに鈴の緒を千切れるわけもなく、気が強いといつても仁三郎を殺せる筈ありません。最初往来で摺れ違った時は、袂の血を見て吃驚しましたが、仁三郎の死体を見て、これは女子供の仕業でないとわかりましたよ。お蔭で大分眼鼻が付いて参りました」

こう言う平次の態度や言葉は、その人柄いんぎんのように慇懃いんぎんで、世の常の岡っ引とはあまりに違つておりました。最初は多少警戒的な気持で話していたお米も、次第に信頼しきる心持になつて、「それから、どんな事を申上げれば宜しいでしょう？」

ツイこう言ってみるのです。

「たったこれだけの事を打明けて下さい。どうして、こんなに沢山の鈴を集めなすったか——、この鈴は何になさるつもりか。それから、八五郎を敵の廻し者と間違えたと仰しやっしたが、その敵というのは誰か、それだけを聞けば、私の用事は済みます」

「ハイ、決して隠し立てはいたしません、何もかも申し上げます。父が生きておれば、どんな事があつても口外の出来ないことです。が、今ではもう昔話になりました」

お米は思い入った風情にこう申しました。

お米の父というのは、芳村道之丞きりしたんざむらいという切支丹侍で島原の残党。一揆きが事を起す前に七人の同志と江戸に潜行せんこうし將軍御膝元で事を挙げるつもりでしたが、島原の乱も案外早く平定し、徳川の礎いしずえはいよいよ鞏固きょうこで、瘦浪人の策動ではどうにもならないと解ると、七人の同志と相談して、チリチリバラバラになり、芳村道之丞はその中心人物として、長い間一味の連絡れんらくに当っておりまして。

鈴を慕う女

その後、天草で習ったオランダ風の鍔かざりを応用して、精巧せいこうな鈴を

作ることを工夫し、芳村道齋と名乗って江戸中の好事家こうずかの人気を集めましためいじんわざが、名人業めいじんわざであまりお宝にはならず、年中貧乏を看板に、女房一人、娘一人を養って事足れりとしておりました。

女房お綾あやが死んだ後は、その唯一の形見きんかんざしの金簪いこを鑄込んで大きい鈴を作り、自分の仕事部屋に掛けて、朝夕清澄な音を楽しんでおりましたが、或る夜賊が入って、芳村道齋を斬った上、あらゆる鈴を盗んで行ってしまいました。

翌る日まで生きていた道齋は重い手傷くつにも屈せず『敵は河井竜之介、敵は河井竜之介』と言い続けて命を落しました。

河井竜之介というのは、日頃父道齋と懇意こんいにしていたこれも西

国の浪人者で、多分父道齋が、島原の残党七人の連絡係をつとめ、その所名前書を持っているのを知って、奪い取ろうとしたのでしよう。島原の残党七人の所名前が判れば、強請ゆすつても訴人しても相当の金になったのです。

一人残された娘のお米は、悪者の手に掛って吉原に身を沈め、生来の美しさと賢かしこさで、一時は全盛を謳うたわれましたが、縁あつて大川屋孫三郎に落籍ひかされ、今は何不自由なく暮しているものの、どういふものか身体が楽になると反って気が弱って、昔父道齋の作つた美しい鈴の音が忘れられません。

夫孫三郎の許しを受け、金に飽かして新古いろいろの鈴を買い

集め、その中から、道齋銘どうさいめいのを探し出して楽しみにしておりましたが、不思議なことに、母の金簪きんかんざしを鑄い込んだ、父の最後の傑作けっさくが見えません。

段々詮議せんぎしているうちに、誰の手を経てどうして売られたか、その鈴は徳蔵稲荷の拝殿にあることを見付け、鈴だけ所望するの
も、稲荷様を騙だますようだまで気がさすので、社殿やしろを全部寄進する代り、
古い祠ほこりを何もかも申受け、この根岸の寮に移して、拝殿に掛けた
父の最後の傑作——玲瓏れいろうたる名鈴の音に、朝夕親しむつもりだっ
たのです。

「こんなわけで御座います。親分、父親の作った鈴の音を慕う私

の心持をお察し下さいまし」

長物語をおわったお米は、物悲しそうに平次の顔を振り仰ぐばかりでした。

九

「親分、これからどうなるんでしょうね」

とガラツ八。

「俺にも解らねえ、二日でも、女護の島みたいな寮りょうに引止められていたんだから、手前てまえも少しは知恵が付いたろう。何とかこの先

を考えてみな」

「チエツ、雁字がんじがらめにされて、納戸なんどに投り込まれていたんです

ぜ。あんな恐ろしい女護ガ島つてあるわけのもんじゃねえ、あの肥めしたきつちよの飯炊がまた恐ろしい力で」

「こぼすなよ、八」

銭形の平次と八五郎は、こんな事を言いながら、根岸の奥の寮を引上げました。

入谷まで来ると、何を考えたか、平次は卒然として往来に立停ります。

「八ツ、手前あの浪人者は手習師匠じゃねえと言ったっけな」

「何ですって？」

「あの騒ぎのあった朝、広徳寺前で逢って、お前が跟けて行った武家だよ」

「へ、へッ、千慮の一失って講釈師は言いますぜ。あの時ばかりは親分の鑑識めがねも曇ったね」

「つまらねえ事を言うな——こうつと、あの浪人者が手習師匠でないとする、あの袖の赤いのは朱じゃなくて紅殻べにがらだ」

「へエ——」

「徳蔵稲荷の木連格子きつれごうしは、紅殻べにがらを塗ったばかりだって、和泉屋の亭主は言ったね、——あの拜殿の鈴を捲り取るのは、賽銭箱さいせんばこの上

に登らなきやならねえが、足元が悪いから、鈴を取るとダラリと行く、塗り立ての木連格子に、袖や袂位は強く触るさわだろうじやないか」

「成なる——」

「それに、大川屋の御新造は、父親を殺した河井竜之介というのは、生きておれば五十を越した筈で青髯あおひげの凄まじい、一寸怖い顔をした男だと言った」

「へエ——？」。

「さア、来い、ガラツ八。手前にとつちや怪我の功名だ、その浪人者の家へ案内しろ」

「親分、こうお出でなせえ」

十

二人は宙を飛んで白川鉄之助と名乗った浪人者の長屋へ駆付けました。ソツと格子から覗くと、家の中は鈴だらけ、主人の鉄之助は、障子に漏るる秋の陽の中にいい心持そうに昼寝をしています。

「今日は、今日は、御免下さい」

八五郎が格子を開けると、

「河井竜之介、御用ッ」

銭形平次が飛込むと一緒にでした。浪人者はさすがに身だしなみで、引付けてある一刀を引抜き、

「何をッ」

真向から向って来るのを迎えて、ピュッ、ピュッと、平次得意の投げ銭。一箇は刀を抜く拳こぶしを打ち、一箇は眉間をしたたかに打ちました。

「あッ」

とたじろぐところを、折重なつて、ひしひし轟々と縛り上げます。ガラッ八も人柄相應に馬鹿力があるので、こんな時は存外役に立つので

した。

河井竜之介の首は、間もなく鈴が森に梟さくらされました。

どうみや

堂宮の鈴を盗み歩いたのは、自分が道齋を殺した時盗んで売った鈴の中に、島原の残党の所名前が書いてあることに気が付いたためでしたが、お白洲しらすでそんな事を申立てても、もう上役人も相手にしてはくれません。一つは河井竜之介の家から没収ぼっしゅうした鈴に、そんな所名前などを書いたのは一つもなかったからでもありません。

鈴を慕う女

もつとも、徳蔵稲荷から盗んだ鈴だけは、そつと銭形平次の手から、お米の手へ返してやりました。その鈴を二つに割ると中に

は細々と何やら書いてありましたが、平次は素よりそんなものを読もうともしなかつたのです。

後日その事について、与力の笹野新三郎に訊かれた時、平次はケロリとして、

「今頃島原の残党ざんどうが、二人や三人ヨボヨボになつて江戸にいることを詮索せんさくしたところで、何の足しになりましょう。それより大事なことをお耳に入れて置きますが、河井竜之介を捕てえた手柄てがらは、この平次ではなくて、ガラツ八の野郎で御座いますよ。あの男はなかなか馬鹿じゃ御座いません、お序ついでの時褒めてやつて下さいまし」

こんな事を言っておりました。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

本編の初出時の表題は「鈴を恋う女」です。

挿絵―萩 柚月

初出――「文藝春秋オール讀物號」昭和六年十一月号　文藝春秋社

底本――「錢形平次捕物全集」第一卷　河出書房　昭和三十一年五月五日初版

編集・発行　錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>